

学部留学生の語りから見た多様化する「留学」の意味

青木幸子, 佐藤貴仁, 田中里奈

1. 問題の所在

日本における近年の留学生政策は、1983年に推進された「留学生10万人計画」をその基本的枠組みとしている。この計画の策定により、留学生の前段階である大学入学を目的とした就学生の入国手続きの簡素化が実施された。その結果、全体の約8割を占める中国からは、低賃金労働に従事するいわゆる「出稼ぎ」目的の就学生の急増が見られた（高2010）。その後、2008年には新たに「留学生30万人計画」が打ち出され、国際競争力をつけるべく、国外からの優秀な人材の獲得が目指されている。留学修了後に出身国への帰国を前提としないという日本側の留学政策の転換（佐藤2010）や留学の大衆化（坪井2006）を背景に、来日当初より日本企業への就職を視野に入れている中国人留学生の増加も見られるようになってきた。

このように、留学生の質的・量的変化が見られる状況の中、報告者たちは「出稼ぎ」が目的でもなく、当初から進学・就職を目指す訳でもない、「明確な目的がないまま日本に滞在している」といった、これまでの留学生像には当てはまらない学生たちに遭遇してきた。そして、彼らにとっての留学の目的と意味はいかなるものかという点について、関心を共有してきた。こうした留学生たちは「留学」という行為を通じて、何を成し遂げようとしているのであろうか。

本報告では、こうした留学生の実態を明らかにすべく、日本語学校や専門学校を経て、大学に進学した学部留学生2名の経験を事例に、彼らにとっての日本留学がいかなるものかを捉えていく。

2. 調査および分析方法

「日本留学」というテーマをはじめに設定し、現在の視点からその経験について、自由に語ってもらうことを目的とした非構造化によるナラティブインタビューを以下の2名に実施した（表1）。なお、分析対象は、録音したデータを文字化したものである。

表 1：インタビュー対象者

事例	日時	協力者	時間	場所
1	'13/10/24	G さん (中国人男性)	1'5"37	東京都内の某大学教室
2	'13/10/20	L さん (中国人男性)	1'1"56	東京都内のレストラン

分析に際しては個人の意味世界を捉える概念であり、「その人間個人の人生観や価値観には過去についての評価、現状についての認識、未来についての決断などが含まれるという考え方に基づくアプローチ」(茂住 2013, p.2)である「時間的展望」という研究方法を使用し、以下の観点から考察を試みた。

①自身の経験から、「留学生活」をどのように意味づけていったのか

②いかにして、現在描いている目標や将来像を持つに至ったのか

なお、時間的展望とは「過去、現在、未来を生きる個人の生きる意味を理解することを目指す研究」(都築・白井 2007, p.8)である。この方法を使用した理由として、「時間」を軸にした概念を使用することで、大学在学中(インタビュー時)の現在という局面から過去を振り返り、未来を予想するという時間的展望を捉えることが、「日本留学」の意味を明らかにすることに繋がると考えたからである。

3. 事例検討

3-1 事例1 Gさん

3-1-1 過去から現在における「留学生活」の意味づけ

Gさん(以下、敬称略)は2008年10月に来日し、地方都市で留学生活を始めた。もともと、本人は当初、就労を目的としていたという。滞日中の親戚から日本では簡単に高収入が得られると聞き、労働を前提に来日したからである。しかし、就労ビザだと思い込んで斡旋業者に申請したものは留学ビザであり、限られた時間にアルバイトとしての就労しかできない事実を来日後に知ったことに加え、一年以上働き口がない状況が続いた。よって、労働するつもりで来日するも、長期間に渡り就労する機会が得られなかった上に、学生として日本語学習に興味を示すこともなく、結果的に、無目的のまま留学生活を送ることになったのである。だが、「日本語を勉強しないと、仕事は見つからない」という周りからの声や本人の自覚もあり、半年を過ぎた頃からやむを得なく学習するようになったという。

このように、明確な目的もなく始まった留学生活であったが、5年を経過した現在、彼は留学を通じた自己の成長を実感しているという。ではその成長とはどのようなものなのだろうか。一例として、日本語学校卒業後に、専門学校進学に伴い上京した直後のエピソードを以下に挙げたい。「あの時、東京に来て、すぐ見つかったんですね、仕事が。で、そこの中の人と仲良くしたかったですね。しゃべれるようになりたい。しゃべれるようになりたかった」と当時を振り返り、日本語の学習を前向きに捉え始めたと言っている。この自発的な動機付けにより、日本語学校時代とは日本語学習の捉え方が変化していることが窺えるが、その要因の一つとして他者承認による自己効力感が考えられるだろう。茂住(2013)も指摘しているように、自身の日本語力に不安感を抱える留学生がアルバイトに採用された際に得られる充実感や、職場で仲間として認められ、その一員として仕事に貢献しているという経験が、彼らの意味世界において価値あるものと意味づけられることにより自己形成が進むという。このことから、Gも留学生活における社会的な自己効力感を得たことが、自己の成長に繋がっていると捉えているのだろう。

また、苦勞が絶えない日本留学を今でも「後悔している」部分があるという彼に、逆に来日してよかったことがあるか訊いてみると、「自分が変わった」ことを挙げた。「中国にいる時に、『ありがとう』とか、『すみません』『ごめんなさい』とか、言わない人でした。絶対言わないですね。で、日本に来たら、何でも『ありがとうございます』とか言うじゃないですか。[それに感化され] マナーとか、こういう自分自身の心が何か、成長した感じですね」と、その自己成長について言及したのである。佐藤(2013)では自己成長を「自己実現」と捉え、それは本質的に存在するものではなく、実現に向かうプロセスにあると述べている。Gも自身の目標として心の成長を目指していた訳ではなく、振り返ってみてそのプロセスを「成長」と位置づけていることが窺える。日本留学を「後悔」とネガティブに捉える反面、来日当初は目的が不明確だった留学に自身の変化=成長を見出していることは、少なくとも過去よりも現在をポジティブに捉えていることを意味しているのではないかと考えられる。

3-1-2 将来の目標

目的が持てなかった留学当初から、日本語を覚え、生活を通じて自己成長を捉えた G は、日本での経験から、新たな人生の目標が生まれたという。それは帰国後、「もしかしたら中国で店出すんじゃないかな」「飲食やるかもしれないですね。自分でやったら、何か、飲食しかできないような感じがしてますね」と述べた通り、日本的なサービスを取り入れた飲食店を経営することである。では、なぜこのような具体的な将来の目標を見出す

に至ったのだろうか。

園田（2003）は大学生の時間的指向性と進路決定に関する自己効力感の関係を検討した結果、未来指向は効力感と有意な相関があった一方、現在指向は充実感・自己効力感の両者と相関が認められたと述べている。これは、現在打ち込めるものがあれば、結果的に自分を知り、社会的な能力を高める経験に結びつくことで、充実感のみならず、将来の進路決定に際する肯定感にも繋がることを示している。G の例で言えば、留学前は挨拶もできず、他者への感謝の気持ちも持ち得なかった自分が、アルバイト等を通じた日本社会での経験から人間的に成長し、自己形成を進めた結果、自信を持つことに繋がったと言える。そして、将来に希望を見出し、その先に起業という現実的な目標を立てたと看做すことができるのではないか。よって、G にとっての「日本留学」の意味とは、日本語の習得や知識の獲得が第一ではなく、留学を取り巻く生活全般を通じた自己の成長を促すものであったと解することができるだろう。

3-2 事例2 Lさん

3-2-1 過去から現在における「留學生活」の意味づけ

Lさん（以下、敬称略）は中国出身で、三年制の専門学校を卒業し、半導体の工場で非正規職員として3年働いた後、2007年7月に来日し、地方都市の日本語学校で日本語を学んでいる。その後2009年から東京の専門学校に通い、2011年4月に大学へ進学している。

Lは来日の理由として、「(工場ですずっと働いても)あまり意味がないですから。あの、中国で何をやるかわからないから日本に来ました。」と述べている。また、日本に住む親戚から、日本は給料が高いという話を聞いたことも、留学を決めた一因となったが、これは具体性のある話ではなく、「出稼ぎ目的」とまでは言い難い。

しかし、来日後は、思い描いた留學生活とはかけ離れた現実を目の当たりにし、経済的に苦しい日々を送っていたという。だが、大学2年次頃から、経済的に安定してきて、学業にも時間が取れるようになった。彼は留學5年目にして「やっと、留學の意味が分かりました」と述べており、現在の留學生活を肯定的に捉えていることが窺える。茂住（2013）では、留學生は日本人留學生よりもポジティブな現在指向性を持っており、これには、過去に受けた「他者からの承認」が自己効力感を育み、それらが彼らの自己形成を進めてきたとある（p. 12）。Lの場合も、現在については、「留學の意味が分かった」とポジティブに捉えているが、このような実感を得るに至るまで、どのような過程を経てきたのだろうか。

L は来日後、しばらくしてから飲食店でアルバイトを始めている。日本語ができないため厨房の仕事しかできなかった。このアルバイトをする中で日本語力の必要性を実感し、日本語学習にも力を入れるようになった。来日後一年で日本語能力試験の2級を取得している。しかし、条件のいいアルバイトはなかなか見つからなかった。時給のよさを最優先にしたため、体力的にきつい仕事が多く、勉強をする余裕はなかったという。留学生の友人の中には、日本にネットワークがあるため、もっと早い段階で生活を安定させられた人もいたが、L の場合は自分の力で探すしかなかった。

来日5年後、ようやく安定したアルバイトを見つけることができ、そこでの勤務態度が評価され、ホールから裏方まですべてをこなせるようになっていく。学業面でも、建築の勉強を始め、日本語の勉強にも集中して取り組み、N1 を取得している。また、3年次の後期からは、熱心な学習態度が評価され、大学から奨学金がもらえることになった。このように、L は日本にネットワークがなく不安定な状態から抜け出し、経済面でも学業面でも、他者からの承認を受け、自己効力感が得られるようになってきたのである。

3-2-2 「過去」の捉え方

L のインタビューからは、過去について述べる時、「何をやっているかわからない」という言葉が多く聞かれた。中国で働く日々、来日理由、専門学校を選んだ理由、それらすべてを、明確な目標をもたない時期であったと捉えている。茂住（2013）において、留学生の過去に対する時間的態度は「後悔・無関心」という次元が日本人より高く、過去をリセットすることが来日の動機となっていることも指摘されている。

ただし、L はこの過去に対する時間的態度をネガティブなものとしてのみ捉えるのではなく、過去の経験を振り返り、これまでの自分とは違った方向性に進むことを選択している。彼は、建築を専門とすることにした理由について、次のように述べている。「専門学校でビジネスを勉強してたんだから、ビジネスは何をやってるかわからないです。2年やって、何も何をやってるかわからないです。ビジネスとか、何か経済学、マーケティングとか、何かいろいろがあまり意味がないと思いますよ。自分本を読んだら、先生の授業受けなくてもいいかな」。このように、「何をやっているかわからない」という過去を自分自身で振り返ることができたということが、建築を学びたいという主体的な選択に大きく関わっていると考えられる。

3-2-3 将来の方向性

L は現在3年生だが、このまま建築の勉強を続け、できれば日本の会社に就職し、実践的な知識や技術を学びたいという。

このように、L の場合は、結果的に学位取得やアカデミックな日本語の習得を目指すという従来の留学生像と重なる形になっている。しかし、そこに行き着くまでには、「何となく留学している」状態から、5 年という月日を費やし、自分の力で生活を安定させ、「他者からの承認」を受けることにより、自己の成長を実感できるようになってきたという過程がある。また、大学の奨学生に選ばれたことも、学業を続けていく自信へとつながったと考えられる。「留学の意味がわかった」と述べる L にとって、現在建築の勉強が充実していることもさることながら、自分の目標を明確化し、主体的に自分の人生と向き合うことができるようになったことも、留学の意義として大きかったと言えるのではないだろうか。

4. 結果と考察

従来の研究では、留学生を、単に日本語や専門知識を「学ぶ人」として捉える傾向にあり、そうした留学生像から逸脱した「明確な目的もないまま日本滞在を続ける」留学生には焦点が当てられず、その内実が明らかにされることもなかった。本報告ではそうした留学生の日本留学の意味を時間的展望という観点から捉えてきた。

まず、G が日本留学に見出していたものは、日本語や専門内容の習得や学位の取得ではなく、日常生活からの気づきや社会との関わりによる自己の捉え直しといった、本人も予期せぬ人間としての学びであった。よって、留学は人間形成にも寄与すると言えるだろう。日本でのアルバイト経験を通じて、サービス業に対する自己哲学が形成され、そこから帰国して起業するという具体的な夢を抱くことに繋がっていった。同様に、L も、明確な目的がなかったために「何をやっているかわからない」という状況が留学初期では続いていた。しかし、アルバイトや学業に取り組む中で、次第に他者からの承認を得ていくことができ、過去を客観視し、そこから自己を変えようとする姿勢をもつようになっていった。目的と将来のビジョンを明確化し、自分の人生を主体的に選びとるような態度へと大きな変化が生まれていったのである。

インタビュー調査から見えてきたものは、明確な目的をもたずに「留学生」となった留学生が日本留学に見出していた意味が、漠然と日本に漂っている状況を抜け出し、将来への明確なビジョンを描いていくといった自己変容にあったということである。彼らにとっての日本留学という経験は、改めて自分自身を見つめ、捉え直すものとして機能し、何ら明確な目的がもてない状態から、具体的な将来のビジョンを掴みとるという自己変容のプ

ロセスに影響を及ぼしていたのである。彼らが日本留学という経験を肯定的に捉える要素として重要視していたのは、従来の留学生が留学の意味や目的として掲げるような、単なる日本語能力の習得や専門的な知識の獲得ではなく、自己の内面により深く関わる変容＝成長だったのである。

こうした留学生の日本留学に対する意味づけを通じて言えることは、日本語そのものの教育にどれだけの意味があるかということである。重要なのは、日本語教育という場において、こうした留学生の内面により深く関わる変容＝成長を支えていくために、日本語を用いた活動を通じて寄り添っていくことなのではないか。こうした方向への日本語の授業の捉え直しが今まさに必要であると考ええる。

引用文献

- 高明珠（2010）「中国人留学生の視点からみる日本の留学生政策」『同志社政策科学研究』12, 1-15.
- 佐藤正則（2013）「留学経験の意味と自己実現についての考察 元留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究』11, 308-327.
- 佐藤由利子（2010）『日本の留学生政策の評価—人材養成，友好促進，経済効果の視点から』東信堂.
- 園田直子（2003）「大学生の進路決定と現在指向」『久留米大学心理学研究』12, 63-70.
- 坪井健（2006）「在日中国人留学生 20 年の動向と日本の課題—日本と中国の留学生戦略を背景として」『駒沢社会学研究』38, 1-22.
- 都築学・白井利明（2007）『時間的展望ガイドブック』ナカニシヤ出版.